

2023年4月16日（復活節第2主日、A年）

牧師メッセージ

「信じないものではなく」

（ヨハネによる福音書20:19-31）

司祭ヨセフ太田信三

トマスは、まるで悔しがる子どものように頑なになり、「傷を見るまでは信じない」と言いました。トマスはなぜ頑なになってしまったのでしょうか。それは、トマスが他の弟子たちが復活の主イエスに会ったことが羨ましくてたまらなかったからではないでしょうか。そんなトマスは、不信仰と咎められるものかもしれません。しかしトマスのように素直に、嫉妬して、ふてくされるほどに主イエスを求め続ける、それもまた信仰者の尊い姿に思えます。何よりも、わたしたちはトマスがいてくれたおかげで、主イエスの優しさを知ることができます。傷を見るまで信じないと言ったトマスにも主イエスは現れ、ご自分の傷に触れるようにと声をかけてくださいました。ここに主イエスの深い愛を感じます。その愛を受けたからこそ、「信じないものではなく、信じるものになりなさい」と言われたトマスは、傷に触れるまでもなく、「わたしの主、わたしの神よ」と、主イエスを「神」と信仰告白したのです。これは、それまでどの弟子たちもしなかった信仰告白です。トマスは疑いました。しかし、疑いの先に主イエスに出会い、その愛に触れ、主イエスへの深い信仰へと導かれたのです。

「見ないのに信じる人は、幸いである。」この言葉は、トマスにだけ向けられた言葉では留まりません。この言葉は、主イエスを直接目にすることができない今を生きるわたしたち、この言葉を聴くすべての者に向かって語られています。「見えなくとも、わたしはあなた方と必ず共にいる。そのことを信じなさい」と主イエスは仰っているのです。主イエスがはじめに弟子たちに現れたのも、そしてトマスに現れたのも「週の初めの日」、つまり日曜日でした。わたしたちも毎週日曜日、主の復活を祝って礼拝をささげています。閉じられた戸も超えて弟子たちのなかに立たれたように、物理的な制約を超えて、わたしたちの中にも、主イエスは来てくださいます。このことをわたしたちが信じるならば、この礼拝のなかで、この交わりのなかで、わたしたちは復活の主イエスに出会うことができる、ということです。なんと嬉しいことでしょうか。主イエスは「あなたがたに平和があるように」と、わたしたち一人ひとりを祝福し、わたしたち一人ひとりにも神の息吹を注いでくださるのです。弟子たちがそうであったように、暗闇のなかで苦しみ、閉じこもっている命に向かって、罪の赦しを宣言してくださるのです。今、あらためてその主イエスの深い愛に触れ、弟子たちのように新しい命に与りたいと願います。そして、弟子たちが変えられたように、この復活節、わたしたちが「見ないのに信じる」幸いな者とされますように。